

21年度 私立大・短大入学状況

私立大入学定員割れ、

ほぼ前年度並みの265大学・46.5%！

不況による地元志向で、地方“好転”、都市部“苦戦”。

「入学定員 800 人未満」の定員割れ、依然、鮮明に。

私立短大の入学定員割れ、過去最高の 69.1%

旺文社 教育情報センター 21 年 8 月

21 年度に入学定員割れとなった私立大は 20 年度より 1 校減の 265 校で、全私立大(集計校)に占める割合も 0.6 ポイントダウンの 46.5%であったことが、日本私立学校振興・共済事業団の調べでわかった。急激な不況で地元志向が強まったことから、地方で入学者増や充足率アップがみられたのに対し、これまで受験生を集めていた都市部は入学者減、充足率ダウンで苦戦している。

他方、「入学定員 800 人未満」の小中規模校の定員割れは、依然として鮮明だ。

短大の入学定員割れ校数は 20 年度より 4 校増の 246 校で、全私立短大に占める割合は、過去最高の 69.1%に達した。

以下に、同事業団がまとめたデータを基に私立大・短大別に入学定員充足率等の概況を探った。

私立大

I 私立大全体の基礎データ

(表 1)

| 区 分 | 平成 21 年度 | 平成 20 年度 | 増 減 |
|-----------------------|--------------|--------------|------------------|
| 集 計 校 数 | 570 校 | 565 校 | 5 校 |
| 入 学 定 員 A | 449,869 人 | 448,345 人 | 1,524 人(0.3%) |
| 志 願 者 B | 3,071,673 人 | 3,063,047 人 | 8,626 人(0.3%) |
| 志願倍率 B/A | 6.83 倍 | 6.83 倍 | ±0 ポイント |
| 受 験 者 C | 2,952,482 人 | 2,941,542 人 | 10,940 人(0.4%) |
| 合 格 者 D | 1,039,063 人 | 1,056,977 人 | ▼17,914 人(▼1.7%) |
| 合 格 率 D/C | 35.19% | 35.93% | ▼0.74 ポイント |
| 入 学 者 E | 479,083 人 | 478,000 人 | 1,083 人(0.2%) |
| 歩 留 率 E/D | 46.11% | 45.22% | 0.89 ポイント |
| 入学定員充足率 E/A (加重平均) | 106.49% | 106.61% | ▼0.12 ポイント |
| 入学定員割れ校数(割合) | 265 校(46.5%) | 266 校(47.1%) | ▼1 校(▼0.6 ポイント) |

(注) *対象は一般選抜、推薦入試(社会人・帰国子女等含む)、AO入試など。通信制大学3校、株式会社立大学3校、募集停止4校を除く。 *調査基準日は、21年5月1日現在。

*志願者・受験者・合格者数は、併願含む延べ数。 *▼印は減少を示す。

*入学定員割れ校は、全学の入学定員数に対する入学者数の割合が100%未満の大学。

*日本私立学校振興・共済事業団資料(21年7月)による。以下の図表等データも、同事業団資料による。

Ⅱ 概況

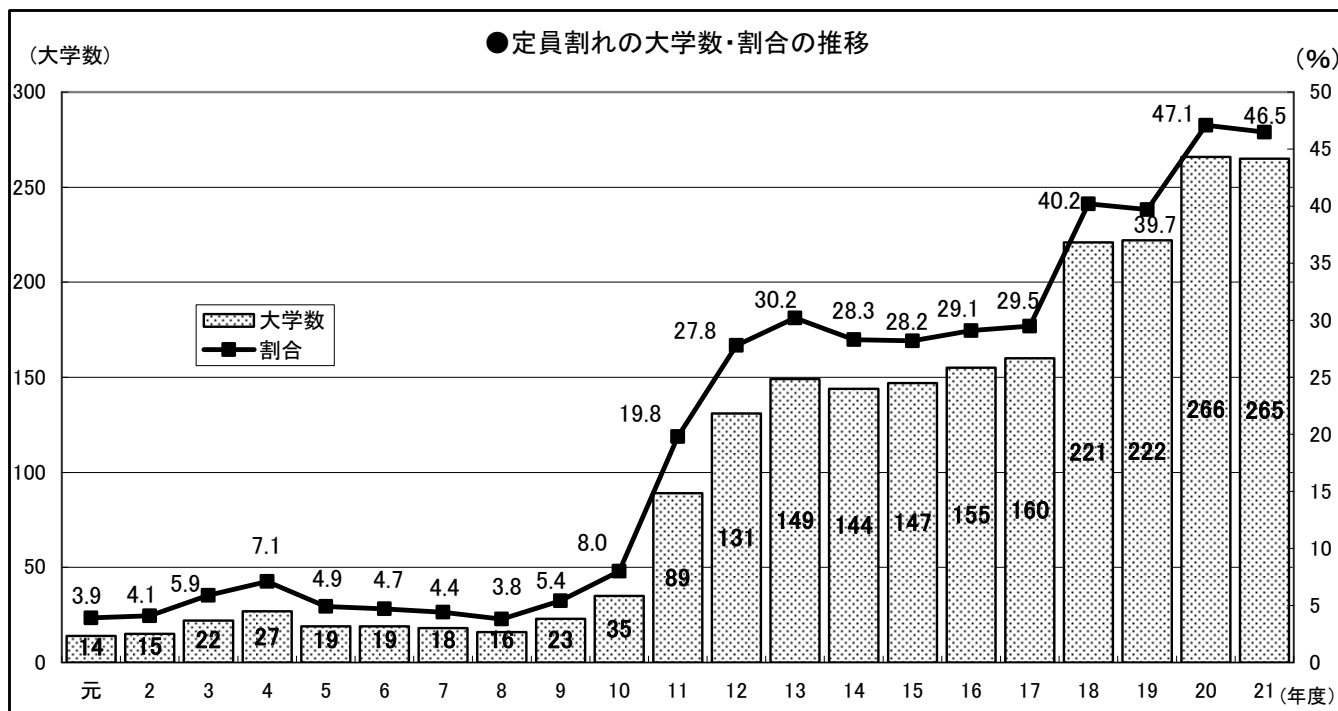
【入学定員、志願者数・入学者数等】

- 21年度の私立大(集計 570 校。以下、同)の入学定員は 44 万 9,869 人で、20 年度より 1,524 人(0.3%)増加。これは新設大学(8 校)や新增設学部(学科)、短大の改組・転換等による。平成元年からの 21 年間の入学定員の推移をみると、15 年度に若干前年度割れとなったが、毎年度増加しており、21 年度は元年度の約 1.5 倍(18 歳人口は約 5 分の 3)となっている。
- 私立大の志願者数(一般・推薦・AO 入試等含む延べ数。以下、同)をみると、最近では 13 年度～15 年度は増加、16 年度～18 年度は減少したが、19 年度から増加に転じ、21 年度も 8,626 人(対前年度比 0.3%)増の 307 万 1,673 人となった。
- 受験者数は、20 年度より 0.4%増の 295 万 2,482 人であるが、合格者数は 1.7%減の 103 万 9,063 人だった。合格率は前年度より 0.74 ポイント低下し、35.19%。
合格率の推移をみると、元年度～4 年度は 20%未満、5 年度～9 年度は 20%台、10 年度以降は 30%台と上昇しており、18・19 年度は 37.06%の過去最高に達している。
- 入学者数は元年度以降、14 年度と 19 年度に 48 万人台に達したが、20 年度は 47 万 8,000 人に減少。21 年度は 47 万 9,083 人と増加に転じている。(以上、表 1 参照)
- 志願者・受験者・入学者数ともやや増加した要因としては、次のような点が挙げられる。
今春の高卒者数の減少率(2.3%)が 20 年度の減少率(5.1%)を大きく下回ったこと、及び四年制大学への進学率が 50.2%(20 年度は 49.1%)と初めて 50%を超えたこと／私立大のセンター試験参加増に加え、その利用方式の複線化等による志願者獲得策の拡大／センター試験平均点の大幅ダウンや国立大「前期集中化」(受験機会の縮減)などによる“安全志向”の高まり ⇒ 国公立大出願の敬遠、私立大への流入、浪人回避で私立大中堅校の志願者増／大学の新設や学部(学科)の新増設、様々な入試改革などの他、経済不況対策としての奨学金事業の拡充や学費の減免措置など。

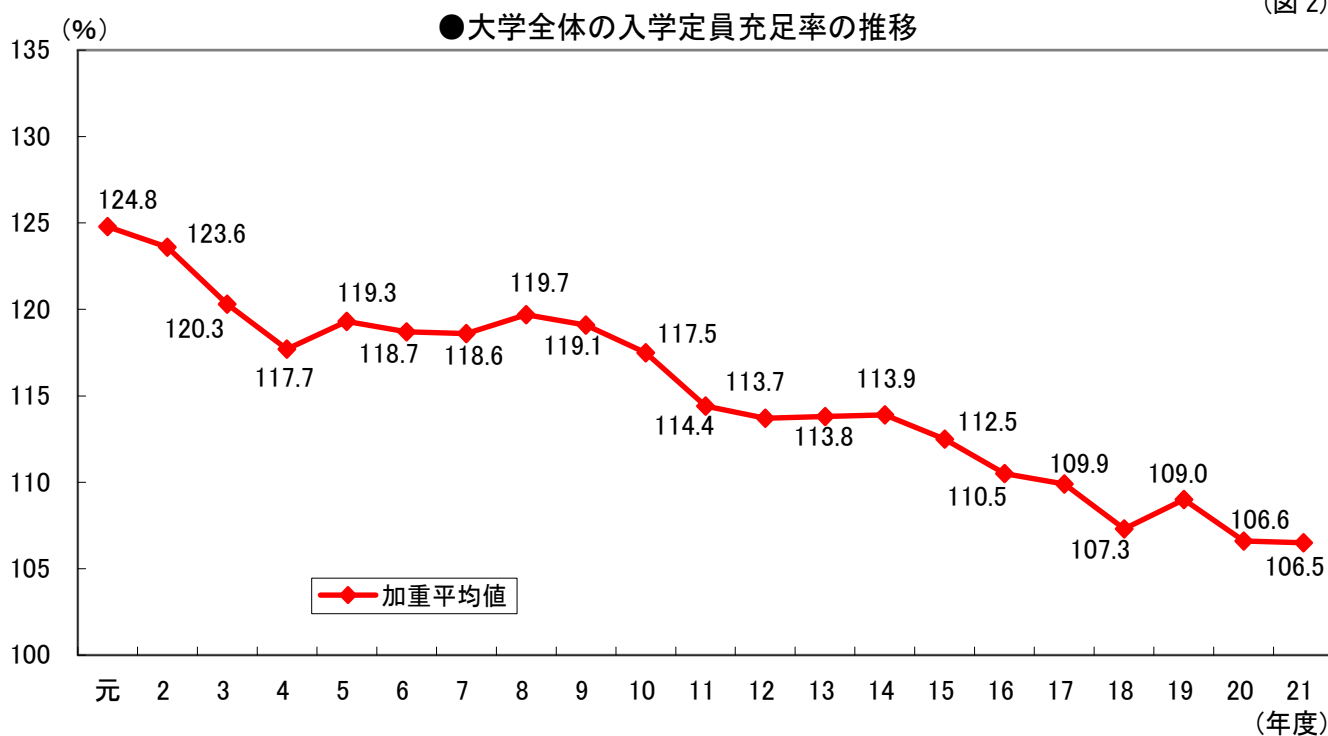
【入学定員充足率】

- 21年度の入学定員充足率は 20 年度より 0.12 ポイント下回り、106.49%。
入学定員充足率 100%未満(入学定員割れ)の大学は、20 年度より 1 校減の 265 校で、集計校数の 46.5%(前年度は 47.1%)であった。なお、入学者が定員の 50%に満たない大学は、20 年度の 29 校から 31 校(全体の 5.4%)に増えた。(図 1・図 2 参照)
- 入学定員充足率の推移をみると、平成元年度～3 年度まで 120%台、4 年度以降、16 年度まで 110%台をキープしていたが、17 年度から 110%台を割り込んでいる。(図 2 参照)
- 21年度の入学定員充足率の分布(充足率の 10%ごとの区分における大学数の割合)を 20 年度と比べると、定員を充たしている充足率 100%以上では区分 100%台で大学数の割合は前年度を 1 ポイント上回っている他、各区分とも前年度と同じ、または若干低下(充足率 120%台)している。
一方、定員割れ状態にある充足率 100%未満の区域では、区分 70%台～60%台が前年度より大学数の割合は 2 ポイント低下したが、他の各区分ではアップしている。(図 3 参照)

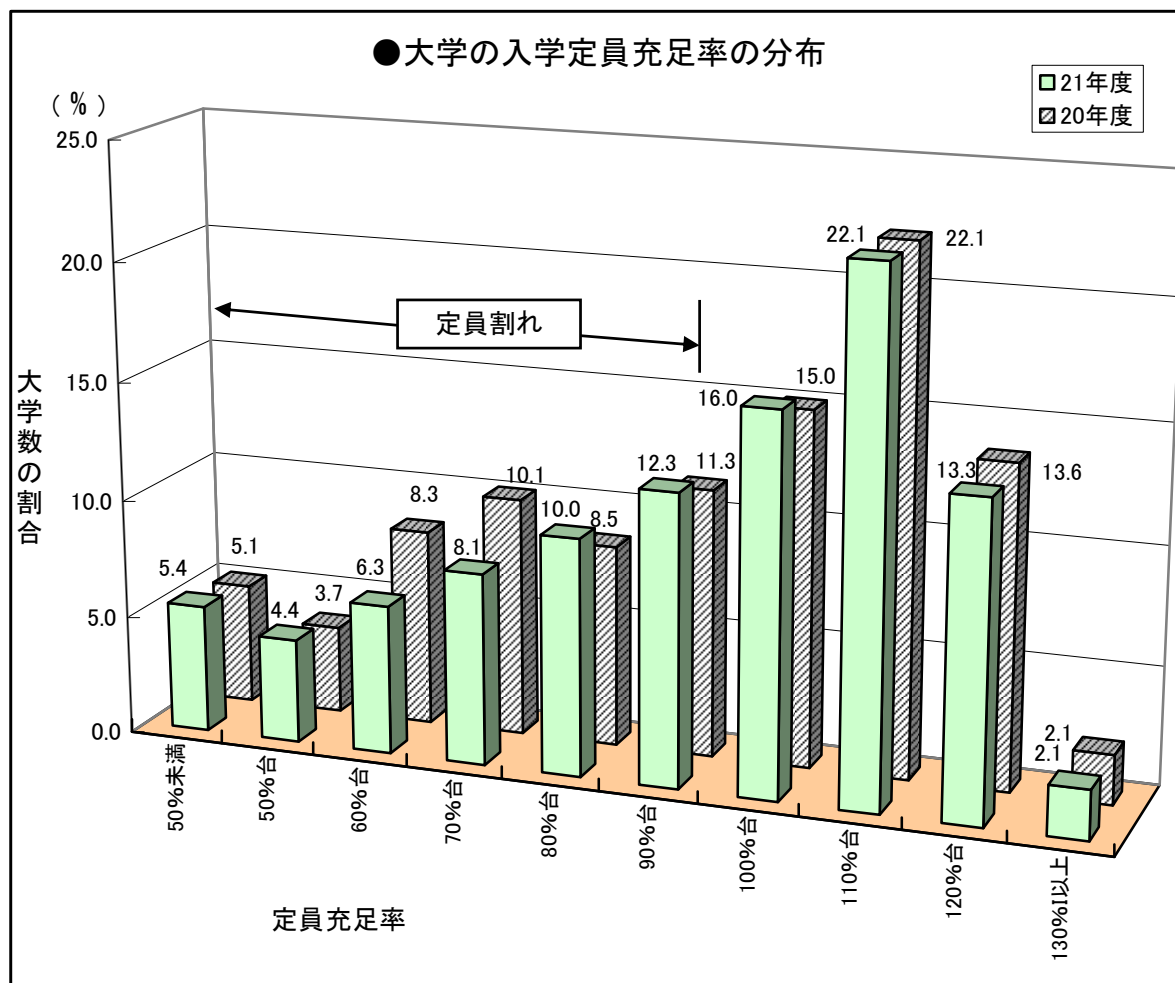
(図 1)



(図 2)



(図 3)



【地域別の動向】

昨秋以来の急激な経済不況は、入試動向にも影響を及ぼしている。家計負担の軽減、進学コストの削減などから“地元志向”（通学圏志向）が一段と強まり、これまでのような、受験生の「都市部“集中”」と「地方“不振”」といった、二極化傾向に変化がみられた。

① 入学者

21年度の入学者数は前述したように、全体では前年度を若干上回ったが、地域別では従来と違った傾向がみられる。

全国21地域(学部所在地別。各地域の当該県等は表2の下段を参照。以下、同)の各入学者数をみると、増加した地域は中国(5.2%増：広島を除く)、東北(4.8%増：宮城を除く)、兵庫(4.5%増)、埼玉(4.4%増)、東海(3.8%増：岐阜・静岡・三重)、北陸(3.1%増)など。

これに対し、東京(0.5%減)、大阪(0.1%減)、神奈川(1.3%減)、京都(0.8%減)、千葉(0.4%減)など、例年、入学者の多い主に都市部での減少が目立つ。(表2参照)

② 入学定員充足率

全国21地域(学部所在地別)で入学定員を充たしている地域は、埼玉(充足率114.78%)、

東京(113.50%)、宮城(112.01%)、神奈川(111.26%)、大阪(108.90%)、愛知(107.64%)、京都(107.11%)、福岡(105.60%)、近畿(104.50%：滋賀・奈良・和歌山)、兵庫(102.87%)の10地域である。他の11地域は“定員割れ地域”で、前年、充足率100.80%の千葉は、わずかに及ばなかった(充足率99.89%)。

入学定員充足率のアップ・ダウンをみると、前述の入学者数の増減と同じような傾向がみられる。

中国(前年度比の充足率+6.30ポイント：広島を除く)、東北(同、+4.83ポイント：宮城を除く)、関東(同、+4.58ポイント：茨城・栃木・群馬)、甲信越(同、+4.13ポイント)、埼玉(同、+3.38ポイント)、北海道(同、+2.71ポイント)など、主に地方での充足率アップがみられる。

一方、東京(同、-2.25ポイント)、神奈川(同、-1.49ポイント)、千葉(同、-0.91ポイント)、近畿(同、-2.17ポイント：滋賀・奈良・和歌山)、京都(同、-2.34ポイント)、宮城(同、-2.26ポイント)など、主に都市部での充足率ダウンが目立つ。(図4参照)

③ 志願倍率

全国21地域(学部所在地別)の志願倍率(一般・推薦・AO入試など全ての選抜。以下、同)で、全国平均の6.83倍を超えているのは、東京(9.80倍)、近畿(9.32倍：滋賀・奈良・和歌山)、京都(9.29倍)、大阪(7.89倍)、神奈川(6.90倍)、兵庫(6.86倍)の6地域である。(図4参照)

●21年度 私立大地域別入学者数&前年度比増減

(表2)

| 地域 | 入学者数 (人) | 増減(対前 年度比:%) | 地域 | 入学者数 (人) | 増減(対前 年度比:%) |
|-------|-------------|-----------------|-----------|----------------|-----------------|
| 1 北海道 | 11,884 | 0.7 | 12 愛知 | 35,059 | 0.3 |
| 2 東北 | 6,125 | 4.8 | 13 近畿 | 11,080 | ▼0.2 |
| 3 宮城 | 8,703 | ▼1.9 | 14 京都 | 27,868 | ▼0.8 |
| 4 関東 | 10,317 | 1.3 | 15 大阪 | 41,611 | ▼0.1 |
| 5 埼玉 | 25,414 | 4.4 | 16 兵庫 | 22,876 | 4.5 |
| 6 千葉 | 21,756 | ▼0.4 | 17 中国 | 7,140 | 5.2 |
| 7 東京 | 148,148 | ▼0.5 | 18 広島 | 9,049 | 0.9 |
| 8 神奈川 | 36,168 | ▼1.3 | 19 四国 | 3,685 | ▼8.3 |
| 9 甲信越 | 5,698 | 2.9 | 20 九州 | 12,779 | ▼3.4 |
| 10 北陸 | 4,399 | 3.1 | 21 福岡 | 19,655 | ▼0.7 |
| 11 東海 | 9,669 | 3.8 | 合計 | 479,083 | 0.2 |

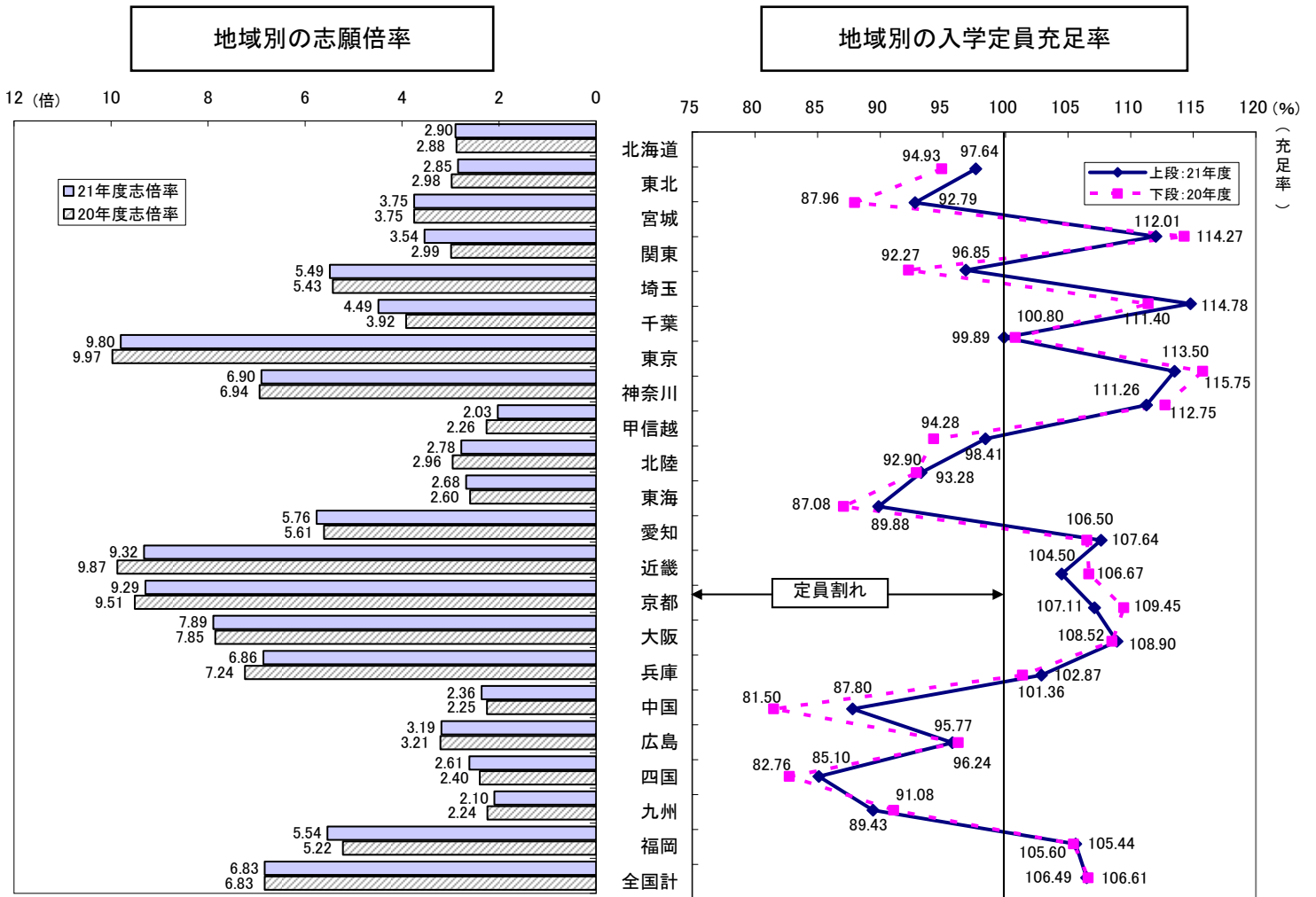
(注. 学部所在地別で集計。▼は、対前年度比が減少)

★21地域の区分：

1. 北海道＝北海道／2. 東北＝青森・岩手・秋田・山形・福島／3. 宮城＝宮城／
4. 関東＝茨城・栃木・群馬／5. 埼玉＝埼玉／6. 千葉＝千葉／7. 東京＝東京／8.
- 神奈川＝神奈川／9. 甲信越＝新潟・山梨・長野／10. 北陸＝富山・石川・福井／
11. 東海＝岐阜・静岡・三重／12. 愛知＝愛知／13. 近畿＝滋賀・奈良・和歌山／
14. 京都＝京都／15. 大阪＝大阪／16. 兵庫＝兵庫／17. 中国＝鳥取・島根・岡山・
- 山口／18. 広島＝広島／19. 四国＝徳島・香川・愛媛・高知／20. 九州＝佐賀・長
- 崎・熊本・大分・宮崎・鹿児島・沖縄／21. 福岡＝福岡

●地域別の志願倍率&入学定員充足率の動向

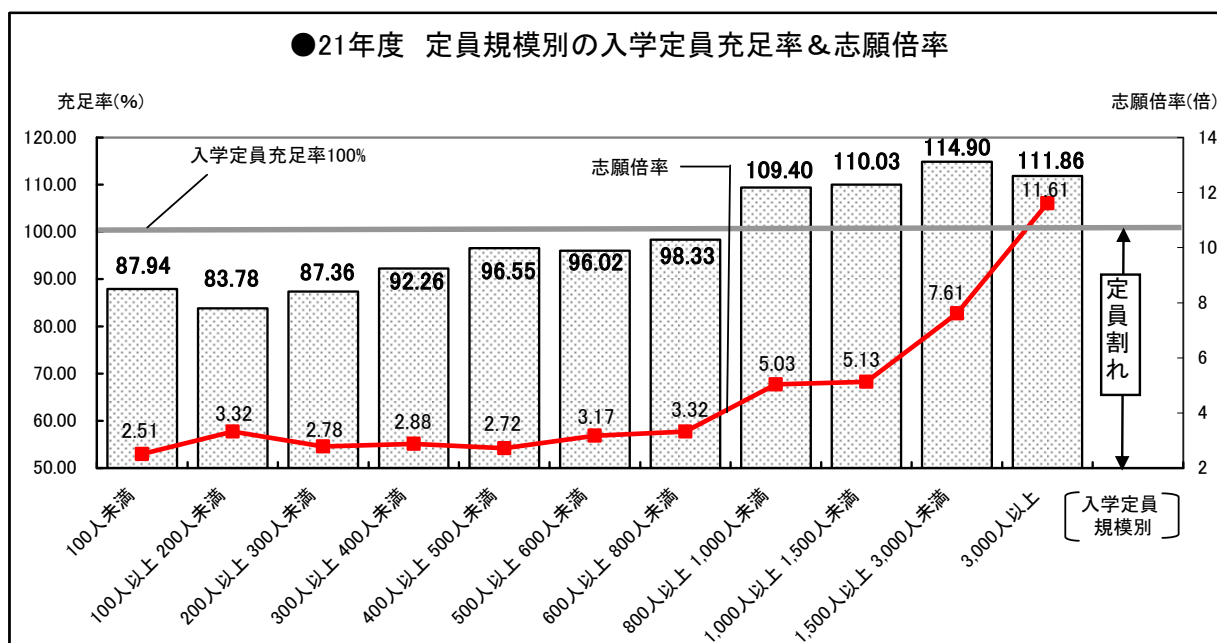
(図 4)



【大学規模別の動向】

- 大学の規模別の動向をみると、入学定員充足率及び志願倍率とも、「入学定員 800 人」が大きな分岐点となっている。
 - 「入学定員(以下、定員)3,000 人以上」(23 校)の大規模校の入学定員充足率は 111.86% で、以下、1,500 人以上～3,000 人未満=114.90%、1,000 人以上～1,500 人未満=110.03%、800 人以上～1,000 人未満=109.40%。「定員 800 人以上」の大学では、入学者数が定員を 10%程度上回っている。これに対し、「定員 800 人未満」の大学では、規模別の全ての区分で充足率 100%を割り込み、“定員割れ状態”にある。
 - 一方、志願倍率も、「定員 800 人未満」は 2 倍台～3 倍台と低いが、「定員 3,000 人以上」では 11.61 倍と高倍率である。(以上、図 5 参照)
- なお、入学定員 3,000 人以上の大規模大学 23 校(全校数の 4.0%)の志願者数は 149 万 8,689 人で、全志願者の 48.8%(前年度 49.4%)を占め、“強い大規模校の寡占化”を示している。

(図 5)



【学部系統別の動向】

- 日本私立学校振興・共済事業団(以下、私学事業団)による学部系統別(下欄の注記参照)の動向をみると、志願倍率の最高は例年どおり医学の 21.53 倍(前年度 22.66 倍)、以下、農学系(9.20 倍)、理・工学系(7.87 倍)、社会科学系(7.36 倍)、人文科学系(6.86 倍)など。医学部(医学科)の入学定員は、医師不足・偏在、地域医療対策などで増員されたが、志願者数の伸びが鈍く、志願倍率は低下し、やや広き門となった。

入学定員充足率の高い学部系統は、体育学(121.11%)、農学系(110.17%)、人文科学系(108.43%)、社会科学系(107.89%)、理・工学系(107.25%)、保健系(105.49%)など。

- 20 年度と比較して、志願倍率がアップしたのは理・工学系、農学系など。入学定員充足率がアップしたのは教育学、体育学、家政学、理・工学系などである。

一方、低迷の続く歯学(志願倍率 2.61 倍/入学定員充足率 77.49%)、及び薬学(同、6.63 倍/同、95.85%)は、志願倍率、入学定員充足率とも低下している。6 年制の導入などで低迷する薬学は 20 年度に、志願者数が若干増加(633 人増の 8 万 5,777 人)したが、21 年度は再び志願者減(7.7%減の 7 万 9,212 人)となり、志願倍率の低下も続いている。

また、歯学は歯科医師過剰などの懸念から敬遠され、志願倍率、入学定員充足率とも私学事業団による 13 の学部系統区分において最低レベルである。

注. 私学事業団による 13 の学部系統区分：①医学/②歯学/③薬学/④保健系/⑤理・工学系/
⑥農学系/⑦人文科学系/⑧社会科学系/⑨家政学/⑩教育学/⑪体育学/⑫芸術系/⑬その他

【定員割れの推移】

- 入学定員割れの大学数・割合の推移をみると、11 年度～13 年度に急増して 30%を超

えた後、17年度までは30%弱で横ばい状態であった。18年度は221校、19年度は222校が入学定員割れとなり、その割合は一気に40%程度に達した。21年度はほぼ前年度並みで、半数近く(46.5%)の大学が定員割れとなり、厳しい状況を示している。(図1参照)

- 定員割れの大学数・割合が11年度から急激に増加しているのに、全体の充足率(加重平均値)がさほど大きな変化を示していないのは、大規模大学・学部による安定した数値によるとみられる(図1・図2参照)。図2は加重平均値で示してあるが、加重平均値には大規模の学部・学科の影響が、図1の単純平均値には小規模の学部・学科の影響が現れやすい。

【定員割れからの“脱出”状況】

- 大学ごとに、入学定員充足率を前年度と比較してみよう。21年度は定員割れであった261校のうち、21年度に充足率を上昇させて入学定員を充足(定員割れから“脱出”)した大学は23校(8.8%)に過ぎない。残りの238校(91.2%)は、一部の大学(75校、28.7%)に充足率の上昇が見られたものの、2年間とも定員割れ状態になっている。

なお、20年度の場合、17校(7.7%)が19年度の定員割れ状態から脱出している。

- 一方、20年度は入学定員を充たしていた299校のうち、21年度に充足率を低下させて定員割れに陥った大学が19校(6.4%)ある。

「定員削減」などの対症療法に留めず、根本的な治療＝“教学改革”を断行しないと、充足率の多少の改善はあっても、“定員割れからの脱出”は難しいようだ。

短大

<短大全体の基礎データ>

(表3)

| 区分 | 平成21年度 | 平成20年度 | 増減 |
|-----------------------|-------------|-------------|-----------------|
| 集計校数 | 356校 | 360校 | ▼4校 |
| 入学定員A | 79,522人 | 83,102人 | ▼3,580人(▼4.3%) |
| 志願者B | 104,461人 | 115,545人 | ▼11,084人(▼9.6%) |
| 志願倍率 B/A | 1.31倍 | 1.39倍 | ▼0.08ポイント |
| 受験者C | 102,413人 | 113,133人 | ▼10,720人(▼9.5%) |
| 合格者D | 85,865人 | 92,355人 | ▼6,490人(▼7.0%) |
| 合格率 D/C | 83.84% | 81.63% | 2.21ポイント |
| 入学者E | 69,058人 | 72,740人 | ▼3,682人(▼5.1%) |
| 歩留率 E/D | 80.43% | 78.76% | 1.67ポイント |
| 入学定員充足率 E/A (加重平均) | 86.84% | 87.53% | ▼0.69ポイント |
| 入学定員割れ校数(割合) | 246校(69.1%) | 242校(67.2%) | 4校(1.9ポイント) |

- (注) * 対象は一般選抜、推薦入試(社会人・帰国子女等含む)、AO入試など。通信制短大1校、募集停止23校を除く。 * 調査基準日は、21年5月1日現在。
 * 志願者・受験者・合格者数は、併願含む延べ数。 * ▼印は減少を示す。
 * 入学定員割れ校は、全学の入学定員数に対する入学者数の割合が100%未満の短大。
 * 日本私立学校振興・共済事業団資料(21年7月)による。